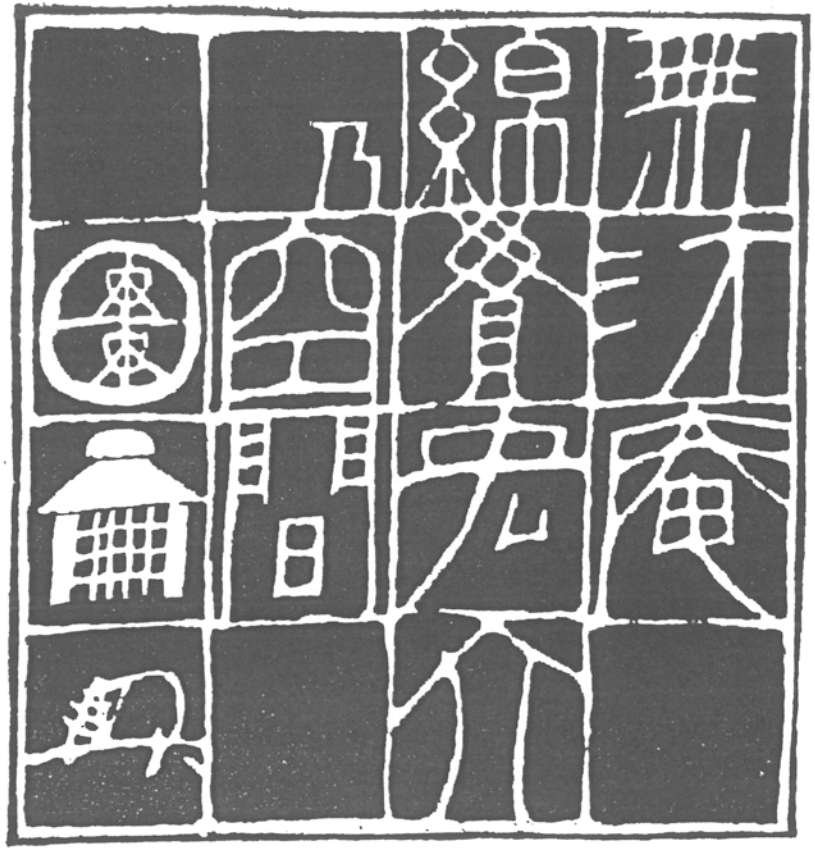
「篆刻列伝」（綿貫宏介さんのこと）

こんな題の小説でも書いたら面白かろうと前から思っていたが、この題にふさわしいNO・1と思われる人は知っているがNO・2、NO・3の人を知らない。情報不足もあるが、人とのつきあいの苦手な私としては仕方がないことだろう。だから、この頁は私がNO・1と思っている人の話にしたい。

私が選ぶ篆刻人は日展や公募展に出している書展の続きから来る人を指していない。今の篆刻は学問ということもあるが、中国から渡ってもう何百年にもなるのに昔の形を追っていて、自然なところはなく古文や漢文の文字をアレンジして印面に勉強していますという風で、見る人には皆同じに見え、ギシギシとした音さえ感じてしまう。

ではどんな篆刻がいいのだろうと聞かれるとそれぞれに好みの個人差はあるものの、私は個性を第一としている。やはり人が作るのだから、その人が表れるというのが目的だと思っている。しかし個性が出れば何でもいいのではなく、巾も深さも感じるのが尚よかろう。昔、美術評論家に見てもらった時「印の深さは教養やその人の深さに表れる…」といわれたことがあるが、個性とはそんな中から生まれるものだろう。（私にはできないが…）

私の「篆刻列伝」NO・1は神戸に住む綿貫宏介（わたぬ



きひろすけ）さんだ。マスコミにはほとんど姿を現さないが、お菓子の「本高砂屋」の文字や酒の「小鼓」のラベルを見た人も多かろう。この人の経歴や年齢を詳しく記すつもりはないが、早くから世界の美術界で名を成し、ヨーロッパだけでなく東洋思潮へ傾倒し、彫塑、陶芸、ガラス、詩文、書、篆刻、和紙、装幀、染め、織、茶とあらゆる分野で活躍し、現在、点心より什器諸々一切自家製を以てする鎌倉式家風点心処「無汸庵」宗家として我が道を行っている人である。

この人はこれだけのことをやって三昧に暮らしているが、芸術家という文字を嫌う。

まずこの人の作る一部として篆刻だけを見てもらおう。篆刻の基本である明確にわかりやすいこと。そして古くて新し

いことが特長だ。この古くて新しい…が非常に難しい。一般に古いものを勉強すれど古いものだけの延長になっていくものだが、この人のはまさに現代的な上キッチリといい古さを残している。

「私は字が好きで書は好きではない」といわれるように、語源、古文字、古詩、論語…、やはりこの教養だから篆刻も凄いのだろう。これだけの教養を持っている物創りの人は現代では少ないのではないだろうか。印の中の文字はどれをとっても古代の学問を練り上げて創られているようで心打たれる。個性が第一といってもこれほど個性的で、綿貫宏介の世界を文字の隅々まで一度見たらすぐにこの人とわかるところが何ともすごい。

私の絵入りの篆刻は何回か見ればわかるし、器用な人はすぐ真似をして自分のものにすることは簡単だ。しかしこの綿貫さんの篆刻は真似をする以前に自分の未熟さを思い知らされ無能な自分と対面することになるだろう。あたたかい中に一点を見つめた厳しさが印の端々に見られて心地よい。下手な解説よりじっくりと眺めてほしい。

綿貫さんの作品集と一通の直筆の手紙を数年前にいただき、今でも私の大事な宝としているが、手紙の中に「遊びにおいで」の言葉をもらい興奮した日を思い出す。でもさほど遠くない神戸へ出かけることはできない。お逢いしてお話をする…多分、篆刻の話をしないまでも言葉一つ一つの中に私の血や肉をあみだしてくれる話があることは十分分かっているのだが、この最大級の篆刻家(この場合篆刻の話をしているので)の前に立つことは人見知りが激しいとの理由だけでなく、今の私にはその勇気は持ち合わせていない。